

# 戦争時代体験記

終戦後76年を経て、戦争体験を持つ人や語る人が貴重な存在となっています。  
 今回、赤岡町在住の池田千栄さんに戦争中の暮らしについてお聞きすることができましたので、その話をまとめ、当時の食糧事情などについても調べました。



昭和13年 池田さんが赤岡小学校入学時の写真  
 上から2段目、左から6番目が池田さん

## 食料の乏しかった子どもころ

### 転々とした幼少期

私は昭和7年1月10日、大阪府で生まれました。両親と6歳年上の姉・3歳年上の兄の5人家族でした。父親が病気になるその療養のため海が近くて空気の良い赤岡へ転地したので、小学校入学は赤岡でした。2年生の時、実家のあった長岡(南国市)へ移り、3年生になると川西現兵庫県川西市へ移り住みました。

### 配給のみで食糧難に

昭和16年、太平洋戦争が始まったのは小学4年生の時です。川西は大都市からは離れており、まだ幼かった私は、あまり戦争の影を感じなかったのですが、それでも次第に食料が乏しくなっていくことが強く心に残っています。

この頃は、すべての生活物資が配給となり、もちろん食料も配給券がないと買えませんでしたが、それを買うに行くのは一番幼い私の役目でした。配給で得られる米やイモ、カボチャ、パンなどは5人家族にしてはわずかで、幼い私が両手に持っているほどしかありません。両親はともに教師をしていたので、闇市などへ買い出しに行く時間もなく食べ物

は配給だけの生活が続き、母は工夫して、家族に食べさせてくれましたが、いつもおなかをすかせていたように思います。

実家から訪ねて来た祖父が、そんな私たちを見て「こんなに食べるものがなくて、子どもたちが満足に育つことはできない」と言って、実家のある長岡に帰ることを勧めました。

### 疎開、そして終戦

大阪の豊中高等女学校の1年生を1学期だけ過ごした私は、家族とともに高知へ転居。2学期から第二高等女学校(現丸の内高校)へ移りました。

しかし、戦争はますます激しくなっていく、20年6月には空襲で学校も全部焼けてしまいました。7月、高知が大空襲に遭ったときには西の空が真っ赤で煙が上がっていたのを見た記憶があります。まもなく、私たち生徒は疎開しました。今の西佐川駅からずっと山の奥にあった学校の講堂で寝泊まりする生活でしたが、田舎なので食料はあり空腹は感じなくて済みました。

8月になり、終戦の知らせをラジオで聞き、13歳だった私や周りの人もほっとしたように思います。みんな口には出せないけれど、家に帰れ

### 兄が広島で被爆

兄はその頃、城東中学(現追手前高校)から広島高等師範学校付属中学(現広島大学付属高校)の特別科学組に転入しており、8月6日の原爆投下に遭いました。爆心地から1.5キロほどのところにあった学校は全て焼け落ちてしまいました。

夏休み中でたまたま学校から離れた場所にいた兄には大きなけがはなく、耳をけがした子どもを背負って逃げたそうです。しかし、兄も被爆の影響で体を悪くし、回復までに長い時間がかかりました。それでも、命だけでも助かって本当に良かったと思います。

事が嬉しかったのだと思います。疎開生活はわずか1か月ほどの期間で終わりました。



## 池田さんのお話を手掛かりに、 当時のことを調べてみました



### 当時の学校って？

戦時中の学校制度は現在のものとは大きく異なり、性別や経済状況によっても進学先が変わるといった複雑なものでした。

太平洋戦争当時、今の小学校にあたるのは尋常小学校といって1年生から6年生までが義務教育で、そこを卒業すると、高等小学校(2年)へ進むことができました。その後、昭和16年には国民学校と改められ、義務教育は初等科6年、高等科2年となりました。尋常小学校を卒業後、旧制高等学校へ進学するなどの目的を持った人(男子)は旧制中学校へ進みました。女子の進学先には、高等女学校(5年)があり、今の中学校1年から高等学校2年にあたります。



高等女学校時代の池田さん

このほかに、青年学校といって勤労青少年の進学先があり、普通科(2年)と本科(5年・女子3年)がありました。昭和14年以降は軍

### 配給制度とは？

事教育が中心となりました。  
 ※昭和22年からは、学校教育法が施行され、新制度(6・3・3・4制)の学校へ移行しました

昭和12年に日中戦争が始まって以来、軍事物資の調達が重要となり、国民の生活物資は不足するようになりました。

昭和13年の綿糸を皮切りに、国は電力、砂糖、マッチ、米、衣料などを次々と配給制としました。これは、生活の必要に応じて国民に平等に生活物資を割り当てる制度で、家族の人数に応じて切符を交付し、それと引き換えに商品を買う仕組みで、食料や衣料の自由な売買はできませんでした。

配給制で得られた米の量は、成人男子の基準は当初1人1日あたり2合5勺(約330g)で、年齢や職業によって細かく区分され、制限されていました。その他砂糖やみそ等の量も決められて、その後も少しずつ減らされていきました。また、次第に計画的な配給がでなくなり、切符があっても品物がなく、人々は食料を闇市や田舎への買い出しに求めるようになっていきました。

### 高知空襲について

食料を確保するため空き地や川原などを畑にして野菜を植えたリ、イナゴやサナギなどを食べた体験も聞いたことがあります。

高知県が受けた空襲の被害については、昭和20年7月の高知大空襲が知られていますが、その他にも空襲は度々ありました。

戦況が悪化の一途をたどると、空襲は大都市のみでなく地方都市にも及んでいきました。高知では昭和20年1月に空襲が始まり、その後3月、6月、7月と続き死傷者の数も増えていきました。

グラマンによる日章村(現南国市)にあった海軍航空隊への攻撃は、香南市でも被害を受けています。第一高等女学校のあたりが焼けしたのは、6月7日のことと推察されます。

中でも、7月4日の高知大空襲は大規模で、焼夷弾が雨のように降り、市街地の大部分が焦土と化しました。また、4万人以上が罹災、死亡・重症・不明者などは7000名を越したことは今もお語り継がれている事実です。

今回、池田さんのお話をヒントにいくつかの事柄を調べて、まだまだ私たちの知らない戦争の事実や心に残った傷がたくさんあることを実感しました。体験談を直接聞くことのできる機会は少なくなりつつありますが、残された資料や遺品を調べたり公開したりして、次世代に伝えることは私たちの務めであると強く思いました。

広報編集委員 井上桂子

これからも  
伝えたい